

オリオン・クラウタウ編

『戦後歴史学と日本仏教』

法藏館 二〇一六年十一月刊
A5判 三八一頁 三八〇〇円＋税

谷 川 穰

アジア・太平洋戦争後に日本の仏教について多くを論じた、代表的な一五名の学者を対象に据えて、それぞれの学知のありようを紹介・考察した列伝。本書の内容を簡潔に言えと迫られたら、そう答えてしまいたい。だが、それら「列伝」の叙述は、よく見れば一様ではない。ある者は史学史を意識しつつ、ある者はバランスよく生涯をたどる評伝風に、またある者は自己をその学統に位置づけつつ論じている。タイトルにある「戦後歴史学」の語の含意もまた、人それぞれなようである。編者クラウタウは序文において、歴史叙述の主体は「アカデミズム史学」の内部どころか、「学問の世界にとどまる問題ではない」としたうえで、「戦後歴史学」を広く捉え、多角的な側面から「日本仏教」にまつわる「過去」の再構築に取り組んだようなキーパーソンに焦点を当てる(一〇頁)ことを、本書の課題として掲げる。狭義の歴史学者以外にも視野を広げた、戦後日本仏教研究のパノラマが志向されているといつてよい。

では誰が描かれているのか。赤字でずらりその名が並ぶ白地の表紙カバーに誘われ(裏面は写真も載っている)、本論である一五名への考察を順次紹介し、若干のコメントを付したい。それにあたり最初に気づくのが、本書には第何章、という章の数字が付されていない点である。便宜的に①～⑮の数字を付して、中身に入っていく。

①末本文美士「家永三郎―戦後仏教史学の出発点としての否定の論理」。周知の通り、戦後の史学史上で、家永は教科書裁判の主人公として重要な位置を占める。だが①での注目は、もっぱら『日本思想史に於ける否定の論理の発達』(一九四〇年)に向けられる。末木によれば、中世を暗黒とみる理解を退け西洋中世哲学を再評価した家永は、それを日本中世に重ね合わせる大胆な挑戦を同書で行い、現世否定の側面を浄土教に見いだそうとした。戒律否定や「人間の罪業の自覚」という、一見現世肯定にも思える親鸞の営為こそが「否定の論理」の究極形であって、ここに戦後の近代主義的な鎌倉新仏教評価とは全く異なる可能性を備えていた、との評が下される。末木は最後に、「戦前・戦中の思想の持つ豊かさを読み直すこと」(四五頁)から戦後を照射せよと提言する。思想の豊かさを見極めるには、個々の思想主体が戦中・戦後の現実社会に對しどう認識したかを直視することが必要だが、そのような手続きに、どこか多少かしさを覚えているようにも映った。

②桐原健真「服部之総―「生得の因縁」と戦後親鸞論の出発点」。いわゆる講座派の代表格であるマルキスト・服部は、今では明治維新研究史上の人物と扱われるばかりだが、真宗寺院

の出身でもある彼は、戦後に『親鸞ノート』（四八年）などで親鸞、真宗教団につき積極的に発言していた。確かに戦前の服部は、宗教全般へ沈黙を守った。その態度は、論敵の哲学者・三木清が昭和初年から一貫して、現実批判力を欠くと仏教批判を繰り返したのに比べ「不自然」だったと桐原は言う。だが戦後は一転、その三木が遺した親鸞論を高く評価し、親鸞を護国思想家と持ち上げた真宗教団を否定、人間親鸞を「この世のお浄土をつくる」存在として教団から奪還・復活させるべく、「科学的歴史的研究」の対象に据えていった。戦後に劇的変容を遂げた理由は明示されないものの、戦後歴史学における親鸞研究の一つの型を提供した服部親鸞論が、三木をテコに生成された様子が鋭く描かれる。

③平雅行「井上光貞―焼け跡闇市世代の歴史学」。井上馨と桂太郎の孫に生まれ西洋趣味の家風で育った井上は、旧制高校時代の大病を機に名門の出たる自己への嫌悪を抱き、その嫌悪と大病そして軍国主義からの解放として、戦後という時代を迎える。そのなかで生まれた主著『日本浄土教成立史の研究』（五六年）は、浄土教の中心的受容基盤を没落する中下級貴族とみた優れた浄土教史研究であり、彼ら貴族の批判精神と自らとを重ね合わせつつ成った、敗北の時代を生きる人々へのメッセージでもあったと、当時の家永三郎からの論難を退け高く評価する。だが同時に、同書は過剰なシンパシーゆえに中下級貴族の実態を見落とし、さらに宗学的法然像にとらわれていたと、厳しい批判も投げかける。歴史研究者にとり時代の影響は宿命的であり、自身も刻印された時代の影とともに「厳しく批

判される日がやってくるのであろう」（九六頁）と述べ稿を閉じる平の覚悟に、息を呑む。

④林淳「圭室諦成―社会経済史の日本宗教研究」。熊本の真宗寺院に生まれ、辻善之助に師事した圭室は、一九三〇年代に社会経済史的な日本仏教史に取り組み、六〇年代に日本仏教史研究を再開、民俗学や宗教学などの成果も吸収した『葬式仏教』（六三年）を上梓する。師と異なりマルクス主義歴史学を方法論に携え世に出た圭室には、歴史的必然性を無視して「祖師へかえれ」という（平泉澄にも通底する）非歴史的思考法を退ける態度が、戦後の同書にまで貫かれていると林は評する。同書を葬式仏教批判とみた黒田俊雄の誤説を指摘する点も興味深い。個人的には、『廃仏毀釈』（三九年）に関して、廃仏毀釈のあとに辻が僧侶の覚醒を見いだすのに対し、圭室は上知令が到来する点に注目したという指摘に深く納得した。明治以降の仏教史を、思想研究や知識人論にとどめぬ場合、改めて圭室の重要性が浮上すると思わされる。

⑤大澤広嗣「古田紹欽―大拙に近侍した禅学者」。鈴木大拙の禅風を継承・発展させ、松ヶ岡文庫長も長らく務めた古田の生涯。花園中学校で仏教に目覚め、東京帝大印哲梵文学科で文献学を修め、大倉精神文化研究所で日本文化研究への視点を養い、大東出版社より『国訳一切経』下訳で原稿料を得るなど、一九三七年に大拙に出会うまでの軌跡を逐一追う。そして古田の学風は特定宗派を超えた「禅学」志向で、研究が手薄な江戸時代、また大拙があまり触れなかった曹洞禅に注目を向けたと評する。『正法眼蔵』を宗学から離れて学術的に検討した業績

に田村芳朗らが絶賛したことや、思想史と文化史をとにも見据えた視野の広さを強調するなど、大澤は終始肯定的な伝記に徹している。では一九七五年の紫綬褒章も含めたある意味「順風満帆」に描かれるその軌跡は、戦後日本の何を背負った姿だったと見るのだろうか。

⑥西村玲「中村元―東洋人文主義の日本思想史」。中村は東方研究会を率い比較思想史の構築に取り組んだ碩学として知られるものの、彼が展開した比較思想の方法論と、実証主義的歴史学とが「実質的な連携のないまま乖離を深めて今日に至っている」（一四二頁）という構図は確かにありそうだ。私なども近代化論的な思想史と敬遠しがちである。だが西村によれば、『近世日本における批判的精神の一考察』（四九年）など多数の論考にみえる、近世仏教思想を世界史的な近代思想にあてはめる方法論を、悪しき近代化論とのみ断じてはならない。フランス人東洋学者シルヴァン・レヴィの影響のもと、西洋的ヒューマニズムだけで捉えきれぬ人間観を内包する東洋思想を組み込み、思想類型を抽出した中村の営為を、戦後日本に理想を示したのとして、また現代のグローバルイズムの中でも再評価すべきである。西村はそう主張してやまない。

⑦菊地大樹「笠原一男―戦後歴史学と総合的宗教史叙述のはざま」。圭室諦成同様に平泉澄を避け辻善之助に私淑し『真宗教団開展史』（四二年）でデビューして以来、戦後も東大で中世仏教を基軸に日本宗教史学界をリードした笠原。一向一揆から女性と仏教、そして新宗教にもおよぶ幅広い研究がいかにかに精力的に、日本宗教史研究会などを組織し多くの研究者を束ねつ

つ取り組まれたかが描かれる。戦後すぐは農民闘争史的だった笠原の一向一揆論が、封建領主としての本願寺教団論へ転じ、『親鸞と東国農民』（五七年）で領主制論を踏まえつつ、思想史的に親鸞を語り出すという推移も説得的。「戦後歴史学との葛藤」をへて「軸足はアカデミズム実証主義史学へと移っていく」（二六六頁）という記述や、六〇年代以降の実践的関心・全体史への意志を「戦後歴史学のゆくえ」と題して評価する点も、笠原のそれか、菊地のそれかはわからないが、「戦後歴史学」観として重要に思われた。

⑧岩田真美「森龍吉―仏教近代化論と真宗思想史研究」。森は篤信の門徒家庭出身で、ウェーバーに影響をうけつつ、親鸞や本願寺教団の研究を通して日本の近代化における真宗の役割を明らかにしようとした社会学者である。かかる関心・問題設定は、戦後に日本仏教と近代化の研究を志す者のなかで、おそらくかなり多かったようにも思われるが、岩田は森が一九七〇年頃に従来の研究方法へ疑問を抱き、戦後の親鸞論の定式化に警鐘を鳴らし、領域横断的な親鸞研究、真宗思想史を構想したという試みの跡にも注意を喚起する。私個人は森を、西本願寺教団組織の近代史にこだわった研究者としてしか認識してこなかった。だが①③と⑦、さらに⑨⑪⑬⑮なども並べて、戦後日本における親鸞研究というアリーナの広さを、改めて森の足跡からも教えられた。

⑨引野亨輔「柏原祐泉―自律的信仰の承譜をたどって」。中世から近現代までの広いスパンを扱える希有な先人、それも近世・近代をとにも本格的に扱ってきた戦後の研究者は、柏原を

において他にない。敗戦後すぐ長期の療養生活を送った後、論文「近代仏教の思想的系譜」（五一年）で、柏原は自律的信仰の確立という問題意識を明確に示し、吉田久一同様に明治の仏教史の歩みを探究しはじめる。しかしその考察は、あくまで「仏教の本来性」確立あつての「仏教の近代化」、という意識を根幹に置いた点で、吉田と一線を画したと引野は注意深く論じる。大谷派寺院出身で大谷大学教授でありながら、親鸞や民衆的信仰への礼賛に終わらず、歴史的非拘束性に目を配り「本来性」の模索と挫折の歴史を禁欲的に叙述した点も評価している（④の主旨の思考法も想起）。なお引野は冒頭の註で、柏原がなぜ歴史学界で知名度が低いのかを明らかにしたいとも宣しているが、その点がやや読み取りづらかった。

⑩碧海寿広「五来重―仏教民俗学と庶民信仰の探究」。学生時代に紀平正美の日本主義的思想に傾倒し、また柳田国男と決定的な出会いを果たした五来は、敗戦後、僧侶や寺院をとりまく人々が身の回りの仏教の歴史や意味を省みるような、新たな実践的な知的探求を構想する。これが彼の代名詞である仏教民俗学であるが、碧海は代表作『高野聖』（六五年）にみられる庶民救済と信仰への注視や、特定の教理や教団組織によりかかった仏教の（辻善之助とはまた違った）「墮落史観」を、五来の研究視座の特質として明快に見いだしている。「庶民一筋の歴史観」のバランスの悪さも指摘しつつ（二四四頁）、ある学問方法の限界を超え新たな模索を行おうと意識するとき、五来の示唆するところは大きいと述べ、スマートな論評を閉じている。

⑪繁田真爾「吉田久―近代仏教史研究の開拓と方法」。近代仏教史の開拓者の一人・吉田はセツルメント活動、沖縄戦従軍の経験を経て、戦後一〇数年ほどの貧乏生活のなかで近代仏教史の実証的研究に没頭、それが記念碑的作品の『日本近代仏教史研究』（五九年）、『日本近代仏教社会史研究』（六四年）として結実する。研究史上は前者が重視されるが、中心課題は後者、つまり資本主義と「慈善」の段階的發展史であつた。だが、だからといって仏教の社会的実践―新仏教運動と、信仰・内面の重視―精神主義とを対置し前者を重視したわけではない。むしろ、同書の補論で描いた、無我愛運動へ踏み込むそこを去ったマルクス主義経済学者・河上肇の姿、つまり社会と内面との激しい葛藤にこそ、吉田の追究しようとした問題があつたのだと、繁田は鋭く喝破する。

⑫前川健一「石田瑞磨―日本仏教研究における戒律への視角」。精神性ないし在家の信仰重視の日本仏教こそが大乗仏教の真の姿とみる日本仏教の基本姿勢は戦後も続き、戒律へ関心を寄せる研究者は今も少ない。だが黒田俊雄の顕密体制論以後ようやく注目がなされ、出家者への律と在家含む信者全体の修行目標たる戒とを混同してきた弊も見えてきた、と前川は指摘する。石田は真宗寺院出身だが在家で通し、浄土教や親鸞も論じた仏教学者であり、同時に戒律研究もリードした（従つてこの弊も体現する）数少ない専門家であつた。戦後の混乱とは関わりなく、中村元らに導かれ日本の社会福祉事業の跡づけを志したという石田は、出家・在家の区別否定に仏教の究極をみる視座を堅持し、行基を起点に『日本仏教における戒律の研

究』（六三年）をまとめる。前川は同書の内容や反響を丁寧に紹介しつつ、現象面の解明にとどまり構造的把握に至らなかった石田の戒律研究の未完成を、近代日本の仏教理解の浅さを象徴するものと手厳しく評する。やや論難が過ぎるかも感じる反面、親鸞や真宗教団へ関心が集中しすぎた戦後の研究状況への（あるいは本書全体の構成への？）切実な批判としても読めた。

⑬近藤俊太郎「二葉憲香―仏教の立場に立つ歴史学」。戦前は龍谷大学で学び、戦後はその母校で教鞭をとり学長にもなった仏教史家。古代仏教思想から現代の神社問題にまで及ぶ「二葉仏教史学」の根幹もまた、親鸞論にあると近藤は論定する。

敗戦を機に戦時教学や皇国史観の支配的影響下からの脱却と研究の本格化を進めた二葉にとり、仏教史の把握には研究主体自身の仏教理解こそが決定的であった。二葉自身は、服部之総の経済構造規定的な宗教・親鸞理解ではなく超歴史的契機を重視し、「戦後歴史学」のもつ国家権力と人民の対立構図を受容して後者に仏教の本質的把握の伝統をくみ取り、なおかつ後者が前者を支えるという人間観を批判的に探求した。この一貫した方法意識が親鸞論に凝縮されており、後年の神社問題や家永教科書裁判への発言・関与もまたその強い顔裡であったとする。

二葉の峻厳な学的態度が終始強調された感もあるが、学術論文には表れなかった二葉の黒田俊雄批判にまで光を当てるなど、孫弟子である近藤ならではの苦闘のあとが窺えた。

⑭花野充道「田村芳朗―思想史学と本覚思想研究」。戦前の東京帝大印哲学科で講じられた島地大等、宇井伯寿の本覚門的

思考―日本仏教論を継承し、彼らの後任として天台本覚思想史研究の礎を築いた田村芳朗。本章の前半では、主著『鎌倉新仏教思想の研究』（六五年）などを対象に、本覚思想研究史にその学説が位置づけられる。松本史朗や末木文美士、そして花野自身の学説との相違を論じる作業がなされており、本書では異色の叙述。後半は、戦前における日蓮像の国家主義的色彩を払拭することに努めた、田村の立正安国思想研究とその時代的刻印について論じられる。だがハイライトは、宗門大学で往々にして見られる「宗祖無謬論に立脚した信仰的な宗学」（三四四頁）と、田村そして花野自らが採る思想史学の方法との相違に言及した箇所だろう。没交渉と対話困難の苦い経験を踏まえ、各教団において信仰と学問の独立という問題を真剣に議論すべきだと論じる花野の提起は、教団に限った話では決しないように思われる。

⑮佐藤弘夫「黒田俊雄―マルクス主義史学におけるカミの発見」。「きまじめな真宗門徒」の家に生まれ、マルクス主義史学への深い信頼に基づき中世の社会構造を探究しつつ、親鸞を終生突き放すことがなかった黒田。彼の「顕密体制論」もまた、親鸞の価値の再発見を目指したものであったと佐藤は言う。石母田正の領主制理論の枠内（と家永・服部の影響）で中世的宗教としての親鸞を捉えた五〇年代前半、支配される人民にとつての中世国家のありようを探る「権門体制論」提唱の六〇年代、その国家像を踏まえつつ中世仏教そのものの内在的分析を行い、「正統」「異端」の見取り図を示した『日本中世の国家と宗教』（七五年）と「顕密体制論」の七〇年代。戦後社会の曲が

り角を迎える七〇年代において、歴史の進歩という概念を捨て新たな探究へ出た網野善彦に比し、人間の理性や社会の進化を信じるマルクス主義と「戦後歴史学」の再生を志向した黒田は、親鸞論を深め得ず逝った。

以上、駆け足で一五本の内容につき概要を述べてきた。略年譜を付した④をはじめ、各章は一五人の生涯を丁寧な概観してくれている。また多くがその主著の分析と、そこに至る学問的軌跡を説得的に追っていて、私のとき浅学には教えられることばかりだった。相当なエネルギーを注いで書かれた労作や④⑦⑨では関係者の聞き取りも行ったことが明示されている、初の専論となるであろう章も含まれ、学術的な意義も小さくない。

また、デイシプリンや専門的に扱う時代も異にする執筆者一五名のうち、①③④⑭⑮が一九四九〜五三年生まれの仏教史・思想史研究の大家、②⑤⑥⑦⑨⑫が六八〜七六年生まれの中堅どころ、⑧⑩⑪⑬が八〇・八一年生まれの近代仏教史研究のグループである。それぞれの世代がそれぞれの角度から一つの書籍の中で挑んでいく、そのこと自体がまず称賛されるべきことである。そこには、八〇年生まれ編者が世代を超えて研究者のネットワークを力強く築いていることも窺えるだろう。

本書の章の順番は、①がもつばら戦前を扱い、⑮が最も若い生まれ（一九二六年）なものを除けば、活躍した時代順も若干は意識されたのだろうが、だいたい並列的である。どこから読んでも、誰と誰を合わせ読んでも構わないというメッセージだろ

う。折々述べたように、ある章の主人公が別の章でも言及されることは多く、直接・間接の関係性を探りながら読む楽しみもある。

個々には注文をつける余地はまだ大小あるが、紹介文の中でも若干は触れたので控える。本書全体に関して一つだけコメントを付け足して、蕪雑な評を終えたい。編者曰く、「これら十五人の「先人」たちを、「戦後歴史学」という言葉をもって総称している」という。そして彼らは戦後の学知の「常識」を作ってきたが、「言語論的転回以後の世界において、「日本仏教」の叙述を構想する」には、その常識を疑う必要がある、とも述べる（一〇頁）。ただやはり、この「戦後歴史学」という語はこれまで繰り返し議論されてきたし、ある程度志向（ないし思い入れ）を伴う限定的なタームではないだろうか（⑦で笠原は「戦後歴史学」と葛藤した、とされる）。あえて中村元や古田紹欽を「戦後歴史学」と括ることのメリットも考えてみたが、それらの章ではわずかなりとも言及があるところか、そこから超越した、また別世界の学者が描かれているように見えたのも確かである。もちろんそれ自体、戦後の日本仏教史研究者の幅の広さを窺い知るうえで重要なだけけど、それをも含んだ学知の構造全体を問直すために使う言葉であるならば、せめて執筆者間に、その用法についてコンセンサスがあつてよかったのではないか。あるいはこう問うてもよい。なぜ「戦後宗教学」「戦後仏教学」「戦後思想史学」でなく「戦後歴史学」でなくてはならないのか、と。この点、もう少し説明があれば、各章のつながりやまとまりについて、より理解が深まったよう

にも思われる。

私の理解では、各章が共通の対象としたのは要するに「大学内で研究する者たちの日本仏教研究」の諸相であって、宗門系であれ国立大であれ、編者・執筆者（そして私）もその点では一緒である。また編者のいうごとく、歴史認識の形成はアカデミシャン以外にも開かれているというのなら、大学外の人物をとりあげること、それが難しくても大学の外との対話をいかに実践したか（しなかったか）への言及も、今後の課題として常々念頭におく必要があるかもしれない（⑬などはその点で貴重）。親鸞論など、時代は違うが倉田百三、そして吉本隆明や五木寛之らの名前も想起されるのだから。

実は私も、ある研究者について本書への寄稿を予定していた。だがこれらの課題を自分なりに咀嚼できず、また十分な覚悟をもってその先学と対峙するにはあまりに無知で、己の学問が浅薄であることを痛感し、筆が全く進まなかった。編者へお詫び申し上げるとともに、執筆者諸氏の学識を仰ぎ見つつ、搁筆する。